

通史編1 原始 古代 中世

本巻には、約三万年前の旧石器時代から中世までの本県域のあゆみを、最新の発掘調査や、文献の研究を踏まえて描き出しました。本県では後期旧石器時代に東通村物見台遺跡、つがる市丸山遺跡などから、人が生活した痕跡が現われます。

縄文時代草創期の、外ヶ浜町大平山元1遺跡から約一万六千年前の日本で最古の土器が出土し、その後青森市三内丸山遺跡に代表される円筒土器文化や、八戸市是川中居遺跡・つがる市亀ヶ岡遺跡に代表される亀ヶ岡文化が華ひらきます。

弥生時代には、日本で最北の水田遺構が見つかり、南から来た稲作文化の影響が本州北部まで及んだことがわかりました。

古代はエミシたちの時代。しかし、ひたひたと中央の権力が押し寄せてきます。阿倍比羅夫の遠征に始まり、律令国家は版図を北へ拡大。やがてエミシからエゾへと移り変わり、北方のエゾの世界の

産物に強い興味を示す都の貴族たち。時代は、防御性集落、前九年合戦、後三年合戦の混乱を経て、奥州藤原氏の繁栄にいたります。こうしたなかで本県域は陸奥国に組み込まれていきました。

中世に入り鎌倉時代、本県域は執権北条氏の所領化。そのもとでの安東氏の勃興と活躍に加え、南北朝時代からは南部氏が展開、さらに北畠氏らがさまざまに絡み合う室町、戦国の世を経て、豊臣政

権による奥

羽仕置によつて南部信直、津軽為信がそれぞれの支配を認められ、中世はその幕をおろします。



遮光器土偶
縄文晩期 三戸町 八日町遺跡出土
青森県立郷土館蔵 小川忠博撮影

通史編2 近世

本巻は、豊臣政権による奥羽仕置（二五九〇）後、廃藩置県（一八七二）までを取めています。

近世の青森県には太平洋側（南部地方）に盛岡藩・八戸藩、日本海側（津軽地方）に弘前藩・黒石藩がありました。各藩とも江戸時代を通じて転封がなく、幕府からは「北狄（ほくてき）（＝蝦夷地）」の押さえ」という役目を担わされる一方、各自の文化が育ちました。本州北端にあり、必ずしも



津軽弘前城之絵図
1644(正保元)年 国立公文書館蔵

農業生産には恵まれませんでしたが、三方が海に囲まれるという地域的特徴から、海に向かった交易のネットワークが発達し、林業や馬産など、各種の産業が栄えました。

本巻は十章から構成されます。これまでの地域研究では藩ごとの縦割りになることが多かったのですが、県内の自治体史では初めて同時代ごとに横断的な構成としました。

また、近年の北方史研究の成果をふまえ、本州アイヌや被差別の人々の生活、蝦夷地稼ぎなど、民衆の動向についても多く触れているのが特徴です。



文久改正八戸御城下略図
1861～64年(文久年間) 八戸市立図書館蔵 八戸南部家文書

通史編3 近現代 民俗



紙芝居に集う子どもたち
1966(昭和41)年1月 野坂千之助氏撮影提供

本巻は、一八七二（明治四）年の廃藩置県から現在に至るまでの新しい時代を扱った「近現代」六章と、県内各地での民俗調査の成果を総合した「民俗総論」三章を収めました。いずれも大正時代に刊行された旧青森県史では、ほとんど触れられなかったものです。

「近現代」では、青森県が成立し、対外戦争や敗戦を体験し、相次ぐ凶作に悩まされなが

らも、その時々々に力強く生きてきた県民の姿を多角的に取り上げました。出稼ぎや集団就職、石油危機など、暮らしに根ざした分野も幅広く取り上げ、当時の県民生活がうかがえるよう構成しています。

「民俗総論」では、これまでの南部・下北・津軽とそれぞれの地域ごとに刊行してきた民俗編と県史叢書をもとに、青森県域で育まれてきた民俗文化の特徴、そして地域性、歴史性へと迫ります。また、付録DVDには、これまでの民俗編に掲載しきれなかった写真や映像を多数収録しました。



昔話映像撮影の風景（十和田市）
2014(平成26)年11月6日撮影